葉山の志らすあり

全

特別
イ 4
3163
70

貴
14
3163
90

萩原葭沼先生著

詞書葉山乃栞

書肆

嵩山堂藏

栞山の葉出序

詞書はぶき山ぶし

目録

第一　惣論三條　五丁
第二　額髮そり人ぶつふ法の事　九丁
第三　人の妻むこふつそ法の事　十一丁
第四　人の子うみそ法の事　十三丁
第五　年賀ふぢそ法の事　十四丁
第六　格式役義なの事　十六丁
第七　病そ法の事　十八丁
第八　人の死そ法の事　十九丁

第九　靈祭するにつらなれるあはれ詞がき　廿丁
第十　遠き所へ出たつ人をおくるかたのことば書　廿三丁
第十一　人をとぶらひ又人にとはれたる時のあはれ詞書　廿六丁
第十二　花見月見のあはれことばがき　廿八丁
第十三　某ぬしのもとにかく事　卅一丁
第十四　自他につきていひがたある事　卅三丁
第十五　あへかる所乃詞の事　卅五丁
第十六　人のおくれたるあはれを詞書にかく事　卅六丁
已上十八條

詞書葉山の栞

萩原廣道著

藤井氏のさきに草にあはれ詞がきに三ッのかたちあるよしを
いはれたるはまことにさることにて其三ッはかのふるきにもみえたり
おくとたらざる人にみせまほしきことなるをさて此人におくりたる
此三ッたがひにまぎれてみなおなじかたにもあらねば
のくにおくりそへむとおもふ事なれどいできて人にとひたるを
あるをとりその中にさることのなくめでたきをよ
まがふことつまにおほくかりてたかくあかる事の

やうなれどなほ〳〵やまとゝぬるぎなりさるハ人〻の世にもれ
いひぐさのいふべくハたるゝふ吳ゐのことをゝるたまきりてみや
び詞の文をもとゞこゝろのかきいだせるのざんぞのゝてハ
右此二ッのことをゝろちくたるたゝいやしたときゝることゆゝさ
たゝられと人となどのゝたぢめをきハゆゝにさとゝうゞきをれバこ
ゝろはゐまどさてゝいひく詞ゞたをゝびもあゝバいとゞん
なれとおゝろゞなまバよのつゆにんゝそゝゞゞまどもを二ッ
二ッ論じこゝろゝくゝとのゝきゞ論をゝこゝんとにおゝろゝは
かのさゝ草といふゐみ半ゝひくおゞゐれバよゝくよみく

こゝろゝえ抄ゝ〳〵

○さゝ草ハ云ッ中ふゝ〳〵おゝ分のゝこゝばまゐハ撰集乃
云の此詞ゐるのうやまひ詞をゝぶきゝるゐたゝこゝろゝて大ゝ
ハ半ゞふゝゝ〳〵撰集なゝるハゝゝのゝゝを朝廷ゐゝたゝこゝろ
ゞゝふかゝゝゐまゝ所ゝゝ〳〵にうやまひ詞をおゝくゝつひ
ゝゝりゝのゝうやまひ詞ゝ此ゐゝふもかみゝゝたゝとゐのゝゝ
おゝゝゝ詞ゞゝひのゝゝゝ所ゝゐゝふゝゝてまゐびゝゝるべきゝ
なゝゝゝ〳〵うやまひ詞をゝぶゝゝゝたゝゝバ古今集の云此詞
ゞゝふ但馬の國此也へまゝゝる時よゝゝあるハまゝのみゝゞふ

詞ゐるゆゑよまうとといへるたとへばものふるたきゝおくふハ
たゝうゝの西へゆきてゐる時ふとかぐきこゆるそゆくこいとん
よわハまうわゝといふさめゝゝゆめきてゐるをこのゝて人ゝいな
人ハいろもたゞまうとぞかくゐる此さゞひのひゞこと物ゐるまで
う〳〵　撰集のおれてこゝばまうゐれふまゝて来りゐる明りまゝゝできくゆゐる
河さゝゞゐるゐどあるゐりのふうゐたきゝ来りゐるハ人ゐゆ来りゐるかん
アきて川ひゐる河のゝゐるゐどかゝゞきゐり　又云ッたゐる人ゐふをとゐ
まゝでかたゝゞゐるゞふゝゐうゆまひ詞ゐを
せまゐるゝまるをうのそゆゝよりうゐまひくかゝゞき事ゆて
勅撰の集ゝ歌のことゝばまるをアてまゆゞ居ゝ撰集ハみゞゐ
奉ゐゝりのゐれゞよくかゐへうきて撰集のおれことゝばまるハ

三代集ゞたゞしうりゐる後拾遺集よハやくひゞことまゞゐを
ゝうされど物例とすゞきるすゞもあり詞花集よりハたゞ
ゝ　ゞゝの例ふきゝゞひてかれるゆゑて何もおゝゐる事れ
をゝゝゝ記かゝられるゐハひゞゝゞゞ物ゐるあゝハされゝ後撰集
の詞のつゞゐ物とゝふゆのゐう後撰集の中ゐゝたゝゝ河ゞものゝゐきゞゞりを
詞ゞ逆されるゝゝゝのふゝゝゐりゞゞやゝゝあゝりゆゝゝまるゐあゞてゝりゐう
ゞゝ　又云ッゝみゝくゆゝるゐれゝゝゞゝ書ハせゝゝゝ文ゐかく
ゞきゐりさて本草のゐたゐゞむゝゐふゝゝるゐまゝさゝゞ
ゝみの事ゐくせゝゝゝ文ゝゝゝいゝゝゐるゐをゝりゐゞのハゐう
ゆゝゐゝてよゐたゐりいるゝゝれさゝゝゝゐ今ゝのゐよみ

の人々おくるまゐれてこれば書をとるふ中とゝへバ書るのけゝあん
うは雪れふりるゆゝこと基あゝの法ゆゝふよみてをるゝやう
ふゝなをおゝるゝりこれいうやまゐべき人のりゝふゝよみておく
ア一年をおのゝ家業をるゞふゝゝおくゝなゞゝなゝうさる
をゝりハせゝをこ文の中に分をゝくゝおくるゝゝくさまで
文かんよハいゝやいゝくゝおゝくゝゝゝりゝくゝゝゝゝをゝ分おゝ
おゝくゝもさゝゞゝくゝ志ひくゝいゝゞ書せんゝあゝバけゝの書
おりゝゝゝも伝るゝ和君もなゞめおゝくゝらんとゝひやゝきゝえ
きゝをゝとゝゝふゝゝゝくゝおゝくゝゞべきゝゝりゝをハいゝゝゝなるせう

そゝこ文のゝゝゝゝゞゝゝて今の世ハ口状ゞゝとゝゝりのふはゞ
○上件のゝゝハ何ゞゝのおゝもゝたゝまゝバ川出つゝゝゝゝのめ
世のゝゝゝゝハいゝゝゝる冠婚喪祭のゝゝゝハゝゝゝ
月花をめゝるゝゝまゝゝ人を伝ゝる射人ふゝゝゝゝる射人をか
ゝゝ射ゝゝゝ射ゝゝゝゝあゝゝゝゝゝべゝゝ分の伝ゞゝなゝう
ゝゝゝゞゝハゝゝゝゝゝ

ゆゝしだろうふいひるゝひくくみやび言のるたすまに武ハみやび
言も清よしもるくくたゞ世のるゝひて法世ふいでゝす
などの歌もある紙きひくくみやびちふうつさんとすまでも
これれおあぬこめくいでたくやきゝくハ相書りゝけれ
だかりされバむゝ此例ハいをと市ゝし今のゝどゞのをと
ふゝ考へやゞゝしてよ紙だようゝかゞれバるゝずゝゞ
あべきこゝちゝるをきのゝをゝみとゞめゝゞゝ
のゝとゝくいちゝやゝけるゝどゞきゝるあゝふおゝつかハさん
ゝまゝゝふえもいゝまゝぬゝとゞゝをかきちゝしてゝ（終）

かなゝゝるのるきゝそゝうゝかれ今うゞくゝゝすゝゝかゝゝるゝ
どゝのをあゞつゝゝひくくさゝゝる紙ゝゝひのやゝゝをいひきゝゝくく
されバゝるゝ紙ゞゝもゝ例をも書ゝくゝいでくゝそゝまゝり
ゝれどかゝゝゝるゝ紙けくゝゝふいゝさゝゝゝゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝゝ
さんのゝのゝれバゝゝゝをいくくいくくゝ大ゝゝめゝゝゝゝ物のゝまゝる
ゝゝゞゞハつゝゞゞゝゝゝゝふきゝゝのいゝゞきゝゝゝ
○ちゞめくかくゞゝゞりすゝゝゝをゝゝいかゝゝゞゝりゝゝいくゝゝゝハ
伊勢物語ふみゝゝゝれバ物ゝゝ人の元服をいゝふゝゝのゝゝゝ
ゞゝゝゝ、ゝひゝゝゝゝゝゝゝゝ

かくべしとなれども庶人（ナホビト）の身ぐるひく今の世ハ志ばしばふ
きてゝのちくゝで髢髪（トタニガミ）をそゝりあたりて大人（オトナ）ゆかりとなれ
たるゝとするなゝひけゝるあれバさハいひぐさしまさりぐ
よぐんぶくといそんゆも元ハかゝぐ服ハきのゝてかゝぐり
りのきゝをいくゝなれバられたゝいやしくゝとも志ばゝし
き系ゝうまでなるぐしされバゝゝありぐ雅義ゆゝしてゝ
みやひ河ふかゝぐきやゝハまづハなにまゆゝきバおたちゝも
ゆぐゝうおゝてゝたるゝゆゝひゝゝなどいそひてあど
ちいくゝやゆゝをゝんぐゝもあゝバその人ゆゝひ

てハをゝゝふなゝうゝくゝをいそひをゝて」とゝ〻〻なゝ
すぐゝかくゝきゝるゝゝといそひゆゝるゝゝゝ「せて」ゝかゝぐゝゝむ
さゝゝはゝをゝゝあなゝるゝいゆゝゝもゆいゆくゝゆゝあいひぐ
なれどひゝゆぐゝをゝるハ大人（オトナ）のゝゝにいゝゝるゝをゝれぐ
後世ゝをゝゝふ河ゆゝゝゝ

をあまたび（ナカバ）茅ぶ新髪そうしをいとひく」とう茅ぶ新髪
そうてをそうふなれることをいとひて」とう…きてもあるべ…
さなの人ふハかくやくよりひくハむらいなるべしもれなのこゝのち
めのりとぐくかくるのハさくびきみてもかくのごとくて
あるれるハそのまうたかくべきなれどこのひさひ髪そう新て
かくかゝみてもはくびをもるまゆくらまゆくまバせんすゞ
なくてかくハもるつさてもるゝ近来（ニチライゴロ）の分よみハ祝賀をもる
こをいゞまもこくわゞてくやくふかけゞもゞあるまゝこ
こくわゞハ言寿（コトホグ）のもるまゝバひをすくくもれうるなゝあう

ざれどあまりふふるわなくる句ふ言寿（コトホギ）ハ言（コト）とうあもゞ
いくゞくさハそのわゞ言（コト）ハやゞて寿なれバまりされバさひ
もるかゝ…かるゞわゞてとのくいゞべしいをひもかくて
齊（イミ）といふをもくくうくくるれバ潔斎ようくくる句すて
祝賀のうくくハをくれど祝（ウツ）てハめくくく祝賀のくふゝれ
ゞ後世ゞりのくくするふハもうゝめゞやくくるゞき
○人の妻（メ）をもゝ人くくくくをかくも次ようハなんぎなりをあハ
むうくハゝ世のゞくく男のゝあるくゞふ女をおくうくるるハ
なうく男のうくようり女のゝふゝよゝくすむなくくひるうくば

たゝうゆゑゝゝる雅語（こやことば）にてもいらぐれバなりまれバまゝ
そのたゝみるふかんやゝをおもひめぐらまゝ いへぎみむゝ
ゆゝへゝゝゝをいゝゝひまゝうく うちぎみまゝうけまゝくゝゝを
いゝゝひまゝのゝゝゝ」などやかゝぐゝゝん いへぎみうちぎゝゝゝゝゝゝ
いゝゝんハかゝゝをこのみゝゝるやゝゝゆて おぐゝゝゝのゝつけていゆ例（かゝりごゝよハ家ゝゝゝゝゝゝ

婚禮ハおのゝ〳〵のわざをつゝしみのたゝるべき
いとまもる親迎して親うち迎へて家に入れば今のむこ入聟の
ゝ〳〵ときゝ〳〵りまちいとくあるべしさてうぶ國のいうゝ人女のりゝん
男の四位てすみきといふてゝをやうぬらぬ〳〵ハみぞうゝと
きゝのやうふおりめべきまゝどさハわゝぬゝとすべくをのと
ゝ義ゝよのべひよハ四べゝれ女のうゝようよべひてむるやう
やあるべきされバゝ義をあるゝ聟ゝ聟近と
いゝゝゝとバすゝなれゝまゝあゝるゝうゝ人ゝなゝゝひのゝべ
ゝゝきゝるをゝうゝべゝゝれいつべよいあのゝゝきゝてのふ

うゝをゝゝうゝ〳〵ふハ其ゝ義ゝまゝゝけゝゝゝをいゝゝひて」とう
其ゝ妻むゝ〳〵ゝるいゝゝひは」ゝゝかゝてゝかゝべゝ者ゝ人ふゝのゝ
すゝふハ ゝのゝゝむゝゝ女ゝ者ゝをいゝゝひなゝゝ心」ゝゝさも
いゝゝあゝのゝ人ゝふハ侍ゝまゝむゝ人ゝ侍ゝゝるゝをいゝゝひなゝて」ゝ
どもかゝべゝ又人のゝあふゝみゝゝを貴人ふゝんゝゝるをう
ふハ其ゝ妻いゝ人ゝゝるゝをいゝゝひ侍ゝるゝて」などかゝべゝ
○人のゝゝみゝゝをいゝゝあゝのゝゝは」ゝゝこのゝうゝまれゝゝゝへゝるゝを
いゝゝひまゝゝて侍ゝうぶ所の事をいゝ入ゝまゝて」をのゝで
うゝゝゝゝゝるゝをいゝゝひすゝゝゝなどかゝべゝゝゝゝハ若子の約

世て作る歌とい[illegible]同じうちとけてうつくしのをばきらふべし
清らぶ屋のうとうもいとふ[illegible]ちのそでとかくて女ハ
めのことハかくべうらぶ男子のをとうみさるハ父母も清女
よろこぶきもれハその子をなく男子よりかくべ
生人ハ[illegible]ハ思うまれさせまくをいとひなりて清う
ぶ屋の女房をいとひきらてなどかくべし清うみのうる
ときかくべきさがめくもれも清おこらとハ大きに宮を備
みのうちを生なれたるひ大名ものの少もなかちなる
屋しのふ紀をかくハ某がこころみをいそひて

まこと生人のをバ行ぐめしのうとをれうまれる時ハ一おとう紀
生人ふうせをふハ某がこころみうる時ふいそひなるとて一
まこと某度のうとをれうまれる時ハ一おとかくべし但敬と
いひふとをそふぶ戸のをうある人なうでかく
まうど紀ハ古今集のをうど紀ハ川のおうさまるわまう
ちぎこと分まうわふる時ふ云〻僧都勝延後撰集ふのう
ぶまこのみこかうあうしうる日おそびし作うるが右大臣
これかれおうませ作うるふ作者ハ紀貫之めうあり とありられ宮まうる
太政大臣などを四位五位ぞうの人をわいひうるまうど

かゝるありしかのよまを世分さうふるなどかゝうこれまてのき
まゝべし　俗ー撰集ハ天皇の叡覧ゆゑのある文の作あれバ皇子たち
さうともかゝるやくまいべくわまごとゝ世さのあるゝ人とこゝ
ゐどこの人をめやしさ考ゝうハゆうゐとそも此ぢやうハいひがゝ
されバせくくこのゐどゝを考へくかゝるありせゝれ分まゝれとうゝきハ
うやまひこハかゝるありしかふ
分まうゝあるゐどうくべし

○年賀ハいうゝくハ四千ゐ十六十七十八十と千まあゝる年
ごゝふゝなゝゝこゝれまゝこゝとに市ゝとゝゐどあるゝをゝを近き
世よハ三十三四千二六十一七十八十八十八とやうふすゝとゝ
ゝゝゝゝ俗例ありまれど四千二を四千六千一を六千とかゝ
まゝふゝゝなれゝゝゝゝゝゝ俗ゝゝゝゝゝゝ

仙千よなりゝせのみをいそひ給ふ人ハ
「仙千の賀をそせのみを」とやゝふるに物よきるゝおくるハ
其ゞ仙千の賀ゝ〻る時よ」まゝ「仙千の賀よよみる」もかく
べきなりたゝき人ふんせのゝ〻するそゝり、撰集のことバまゝの
ごゝくなるべゝ六千を耳順七千を古稀などかゝの近俗の
なゝりゝあぢいとあぢさ物ゝかゝるゝぞさハかくまゝきゝ
まゝ其人の子孫ゞの為ふよみてやるゝふハ「ち君の六十
の賀ゝのふをいそひまりて」「おわたの君ハ七千の賀ゝまふよ
よみてをゝ」などやゝゝあゝべゝ歌をおゝせてゝるふ人ハ

きゝあふよあるならバたゞふその歌をかゝるもけゝべくまゝハ
「七千の賀ゝのふを御ふよ寄鶴祝よあゝ歌の寄字をよるまゝよりて」ゝやゝふか
くべきなり」つゞでふいふ寄鶴祝よあゝ歌の寄字をよるまゝよりて
ゝゝ「ハ」ゝ「ハ」ゝ「ハ」

まゐらせて」とうかがひてあるべし。極までもさいひてハあまり
ひくあふやうなる役名などなるべ〳〵ハ「何のつらさふなるせまふとて
を」とやうにかくべし。物さもいひぐさ記ハ年ごろまゐやうた
つらまたりのゐ作いさをあるべきれてかゞみけゐ記おろぞと
さまたせさるべきをいそひたまりて」などゝ何ごとのさやうふ
もかくべし。まゐやうたるべくのうのハかゞみもあるべくれば大りさちう記世の
例ゐまゐばかやうるう紀くこの人の功をもあるべくもあるべし。縁をまし
まりりくこるう武ハ作業行なるべの類ハおりりくばかりくばかりそうるゐるべう
徒をくいくられこるふハ作まりてそまりハせまふこをい
さひ系〳〵せて」などかくべし。ふろくもかくべきまどふ

人〳〵といひ〳〵ハかりこるゐふ沼ハ記をいくるれバまだ〳〵ハ
し〳〵ふまゐべし。仕まりそうまりそうまりゐ和行を跡ふまその人ふ
ろくこるもよりくべし。次ハ切采技技羊もいるまりられば
よりくべし。物くさぐのかこやくあるべくれバその時ハ さ居り
まりべひくくなるべ人まりべ居し。かのるまでの時役まゐふハうり
ゐも官まりられまふゐハ任せられまふたりべかくべりまゐ官
字ハつりさこるもりまりて。ほしてこるたゞめくなりだなく字
こりりるもりべりくべきこりべるり。ふゐもくゐの出べりふくこを
なるりの役ふあくこりもりべひハひべくこ官位ハ朝廷よりり
弼ハるゐふいべきこりべくこひあ元澤國ある山のえ

ふよそへくいつゝもあまと無位の武士の將役まと庄屋年寄
などふまろ〜こゞひを位ふよそへんハちゆけるたるゞ多り
さて扨ふるたまろ〜ゆくくゝハ某が庄屋ふなり〜「財」とかまても
よろ〜他ゝなずくてさとるべ〜さてまと役名格名のひく
ゝふとゝふ詞をそへくく「庄屋」とゝふものふなり〜「財」などハ
むぐう〜ぶいがり紙〜くとゝ君のりたまく〜役名ふく
はゝふまとなくゝひくゝをもよそゞふハいふまゞがゝ
まと他國のほなゞ事をもろふふハ何國のまおうせう君の用
くまたりうゝ財よみてつゝ〜「なるなどもかぐべ〜此鄙いうを

ひろ記事なれバかゝて定めていひゞゝ准へてさとるべ〜
○人のやあ財ふらあ〜ふゝふよハ「ロゞ〜ひまふよ〜うけさ
まそり待ゝて「こゝろうなやませまふくきゝ待ゝて」なども記
又世ゞふその病名をきゝて「あ〜のけふなやみまくるよ〜
ゝ〜ハ〜ハやゝ〜ゝまふ「あゝくゝ」などもかぐべ〜せくくゝハ沸
こゝちさハやゞせ結いぬよ〜うけのハりなまくゝ」などのやま
ひ沸をそへくゝかぐべ〜さてかくハさゞむりのゝすべく
かゝやゝふわろきゝこのゝとハせうそゝふこあらふもゝをバ
こゝのやうたなゞさあかぐべきれバ前ハその消息よりふらく

ぞ一すり別ふうくもたで[illegible]ばうりうたてやる[illegible]
おさられハやむしをとるあ時の仏をとるまくのこやうき
人の父母妻子などのいとよわくなりてうづくひて吉ち
ばうどうどなどふんづきあく[illegible]などよみてやる[illegible]
いとふまあやうあるべ[illegible]なりしよ[illegible]あるめでこふひ
なることもあるべ[illegible]これハ病をとぬこふのこふハかのこ[illegible]
半ふもさるようハいるべきことこさてめのふうたきる
ゆくゆく時ハ某ぞやまひよりづこひる時よみてやりる」某ぞやま
ひこる時よりあこひよつこりる」なぞかくべ[illegible]ふのふそれ

病名をよみいるこことあこバかかこびその病のようをかぐ
仏一云のこふかてこうふをあとこれも此ようれこふハうぐこび
きこうこうこうハかこぞうこぞ
行このふもこれこうりあぞこへてちるべ
○人の死こるをバ分まこるかこうするふこいひきこある
こびちおこるをこるもるなどいふ[illegible]古こう集ふいめこるの
分おこうこ時よこるこ「さ死のおこたをいおこるこをを
所のあこふちこうこるあよあるおこりの所のおこたをハい
おこちぎみみまこうこるを時ふふこうたよこたをこめく
こる修ふよみこる」秋吉今集よ六條按改かこれ作りて後

云〻などいふ　後撰集に葉かハたゝ雪ふるこゝを送葬とりどゝるゑぶくゝふ
うれさまどゝれといふなるようさなるまふいてゝぶ
さればこれハ例のキ人ふるこせをるをとりものふきるゝおくをゝ
などのおふくゝその名ぞゝれ人の旗などゝおくる云ふさかく
ぐもいふゝ父君のかくれまくるこゝをかるゝみをもうて」とゝ
せゝうとの君たゝさえたるまふゝこゝをいとゝみものゝせて」とゝ
かゝぐゝしゝそのゝたゝすぐゝて喪をとゝゝふ数よハおゝひふゝも
らせるふをなゝどゝあまるゝゝせんゝて」キ人ゝ中おゝひふ
こゝゝせおりゝまれをなゝどゝあをゝんゝて」などかゝぐゝおゝひ
とハ忌中のゝゝひゝくゝもいふきゝゝゝくゝあれゝもおゝゝ忌といゝくゝ
くゝりめらみのゝかゝくゝきゝバ喪中のゝふハるゝゝ

まゝとぶくゝしゝもかゝくゝゝ樒葉のゝゝまるゝふさいひゝるもあり
いゝゝゝ服ゝゝゝひゝハ黄衣きるゝゝをあれり法ゝのゝゝとゝふゝゝふゝゝゝと
いゝゝゝれバやゝて今ゝの三年あるゝ
かゝるゝくハいゝゝあるゝゝるもあるゝゝれバゝふハやゝてゝゝ分よゝゝ
いゝくゝゝゝ
けもあゝゝけゝゝゝゝゝハなゝゝさあゝとゝかゝくゝべき

○人のみまゝうてたのゝるゝゝすゝるを追福追善なゝゝゝハ
らゝゝこれハ佛家ゝゝうゝゝゝるゝゝれバうちまゝうせていゝゝゝ
ゝゝふあゝゝさて今ゝの世ハ霊祭（ミタマツリ）ゝて一周忌ゝ年忌七年十
三年十七年　九五年　廿三年　五十年　百年　なゝゝいひて皆
佛法の儀ふよりてあるなゝる　仏ゝかく行年ゝゝゝと定めゝゝる
ゝゝハ仏経ゝもちゝゝるゝゝあゝゝハ

[illegible]ばかりにてはなりがたしとて
[illegible]ばかりにてはなりがたしとて
[illegible]ばかりにてはなりがたしとて

百年忌などハ故某ぬしの五十年ばかりぞ」とも或ハ
「とつみあやの百年の忌」（十）のふふるたことぐもものひつぐ
げ給へり」（高祖父母より六ふ）とものちやとりあり（これ〳〵のこと行いつ）あるべしこれかとそなぎこへくもるべし百年忌ハ先人
たりとものぬ人なるべれぞ系めしく対もるさをむとをべし先人
よりせさをのふたぐあやまり仏ををへくいつぐたなり
さてまさ霊前（ミタマヘ）ふたむくるこなるバ平霊よむひてもの
いつぐとくふかたしかもそのぢやふよむとの後なり
作まぐぞ大くこ詞ぐ記いなるるべしかんとなるバ
「後の作日ぐしのふつけてもむしのすぐもこひいぐれ

作りて」とも「某（祭主）ぬしの後ぐ作ふをさこ作ハは
よりこびまつめこおめひのふるふつけて」とかべしこれ又
のこぐぬあるべれバあるぐめ
いふべき新まあるべ迫べてもるビさて又寄（ベル）何懐回るどらふ題をおく
せくこををふくふうをてやるふハ故某ぬしの何年忌
まふを菊ふせてもものびなるこの故某ぬしの何年忌
花情魯といふこをを故某ぬしを月ふせてものびなる
して」ものやこめあるべしのふるをるをくハいさこ
そのくぢあるべしそハ先一周忌なるバ「某ぐ名まうう
てよ又の秋何ぐしの作ぬく後のわぐしる見ふよある某ぐ

才まうして後三年の日ぎしする時ふいうくのすぐもとひ
いでゝ「茅が七年の後ぞ生ふる」（業主）うしする時あよめる」
などかくだて三年よりほハ「才まうして」ぞの間ハたぶぐし
あまりものどおくなりて「才まうしする」などいえハなるて
いとづゝみるべきまだ紙をおくせるるふハ「茅」（業主）がちれ
十三年ちふ松のようせくちのぶんをよめといひなれバ「茅ぶ
よわぢの三年三年の日ぎしする時たちたふようせてむちをも
のぶこころをよあといひをまこバ「茅ぶめ」（妻）「才まうして」のうれ
春柳ふようせくちのぶこころをよめる」などかくべゝ懐慕の

懐字ハ[illegible]ふとゝもむつるせるなれど何ちれたよハちのぶとゝよ
ちきこゝおのふてハあまりことひろくしくいふぐしうるひ
うゝ紀所あるぞ物か
○遠ハたゝろへ出ろうへ人をおくる間ぐれたよハ「おぐまの」うゝ
いでゝちのみをみおろるまるとて「陸」てへこぐのうふ
うゝ海のそれむけよ「こうの」ぞへ出るせのふうるまをうゝみ
よのうゝせて」ちとかくしたうゝ人うハ「行ぐ」へ出るせうぶ
清おろうつうゝまうる「おへのぐゝ」せるふ「陸」るの
ちれむけふよみくちる」などうくへゝたうゝ人ちせる

る例を撰集のくゝハ書のごとくなるべし撰集の詞をたゞしたるやまゝハ詞をたゞさずしてまゝを用ゆ
とゝ人倍るまゝあるの詞をあらためてかくゝ
お名にへゝ上ゝ引なるべし　これ手づくりの須ガなるさゝ
上名字の後ゝ
別のゝゝさゝて酒をのゝゝなるまゝをつゝとかく
倍ホ餞別ゝのゝゝゝたゞう詞のゝゝハ
（の字べき馬の鼻をそるゝふ門むてゝさゝるを体
そふいひすゝるゝく留別のゝゝ
ゝゝべゝまゝあづまのゝゝなどかゝりゝふかけゝハ何

餞ハ字直一送行設賀也トカリ然ハ此字モ其ヲガヲ指ニ云ヘ倍ニタ〻別ニ別ニカヲ云ハ本意ニテズ

ゝ處ゝまゝゝあゝゝゝとヒなゝき旅ゝあゝハ西ゝゝゝ
ひと波あゝぬゝあゝやゝうのゝとゝホ生ゝあゝのゝのお名を
知ゝゝさゝていゝゝゝゝゝゝあゝを江戸へ西ゝゝゝをゝゝゝ
もあゝはゝさゝゝゝみやゝこのゝ之ゝとゝゝゝゝゝ者で旅のあゝゝ
をひゝくゝさゝゝのゝゝゝあゝて旅へゝとゝふゝゝゝあゝりあゝゝ
べゝゝゝゝ世ゝゝゝゝ者ゝゝゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの俗を
ちゝゝゝゝゝゝゝゝハゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なぞ不とらふハそのあさとづまる所よりうけて心ゑるもちめく
かくしハ古くなるふ友のあつまへまりて時みちのくふへ
まりうゑ人心なといへるとハのれるにはよりてさて云
こゝのわりくかりまりできて云〳〵心よのりてかりて
云〳〵ふ様のあとふくゑ云心なとあるを考へくしすてふ
いつまゑ不を年ゆくいあくハふとらひいまていてぬふハ
ゑとゑあとよりさてハへとりまりあひをれうゑる
人のこゝ代ふまりりく年へくゑにまりできてまくい
かへりゑる時とあくゑあふハさ死の年ふりうこのふかり

てすめりくふいひ下のふハ年へてこのゆりうふまり
でまくかへりくふいくるこゑれくれをとぞまりしりゑり
いへりくこ物をとさ死年ゑさてゆくゑのるあるゑてのゆをもめさ
くふとぞいひりくゑあるさてゆくゑの本よハいば
よりくさてゆくゑこのゑ中ゆくのゆをゆとふとりあるハ
ゑあるハさぐりされバあるゑ俗ぐも門出れてまでふくいへくふも
ゑふくゆくのゆをもゆくいへくゆもあるをりくあやまりとせくゑ
どのゑるくありさてゑ人おのざりられてゆく時ふありきてる
くふむりひてよめる頃ゑるふハいづくへゆくふどりゆくをバ
りとかくゆでたくさるハそのゑへゆくをいりくきりく
おりゆゑくゑ年ゑるゆどの人るれバくづくゑ死ゑをくと

るべきものあるべければ、うさんばかりのこゝろをもてよろづ
ゝ、ものしりくものゝことをとゝのへあつめばかりそとゝまる
こゝろを」とゝ「今日よりいまよりたゝちまゝせんことのみられ
しさを」とゝこゝまでおもうのあるべけるさを」などゝ
やうの事をこゝにくよろづ行ひなどもかさざるよあるべし
これをこゝ物よまうおくとゝ今人ふるせをあるする
しふ撰集のめくなるべし「なぐさをこゝふなどいあてハ
ゝあるべかくぐりどんなるべをもしむとハ今人のゝこのま
さゝ〻ふるそのゝゝひをものゝとくこれ又ゑ物ゝ

○ちぢめく人をゝひゝる時の事人ふとれゝる時の事ハ
詞ゞ紀ハなゝてよろしゝ中ゝハまさしくきんめなどゝ
そのゝひゝゝ中ゝとられゝる者をゝぐしくかゝぐ紀
いゝれなゝまでゝこゝまでゝもさ紀の人ゝゝこのゝて集ふ
なまひゝるまゝもかゝつけてす人ふもゝせ後ふと
中ゝへん中あなまでゝるゝどゝひゝるゝ時ハひゝふる
あかゝぐゝもいゝゝまでゝくまゝは一ゝぐゝゝそのゝふをゝく
ゝもゝゝるゝ一ゝをゝわハ「ゝゝくまのゝゝかひあゝ
くめゝ一紀中物後ゝひたまゝかつるよゝゝぐゝさ」

うたゞめてさゝひしやのゝせゝこゑを」とうたのそう
ゐゝの今歌の詞ぞうをかゝげ」先人ふハめさせのひ
てかゝげける紀おりせゝとまくるよろこびのんとかゝれど
そゞめてさゝひつゝふ法酒（ミキ）ゝゝだうくるかゝげかきを
などやうのるなるぞゝ近世の人ハ某めゝをそゞめく
ゝゝひまうて一ちゞかけどもそれハめちらんの事なれ
バいゝづゝどゝしさ紀ぶいんゝゝく詞ゞ紀ハ今のれる
事をかゝぐきものあきばさやうかいそでもちきるを
ことさゝふかきつくるハうるさゝゝるゞ事ゞ紀ばかりさて

まゝとされゝさゝうもそのゞやうかくさゝ」さてゝあゝひ
まゝるかゝゞけるきを」とあゝひるひくにちの強うけ
ゝまゝうゝそゝのうれしさのあゝりふれゝるれゝ海山をゝて
ゝひまゝゝことのうれしき小」なゞどかゝぐゝ先人ゝるは
ゝゞゞまへさせるひゝかゝふ」まゝゝゝるのかゝゞけかきと
ふりそへくゝるゝせるふかゝゝまうのんを」なゞどいゞまを
ゝ紀のあへゝらひれ詞をうゞゝ源氏抵ゝゝき本の
きゝふ紀のゝみおゞゝうきてやう水のあいゞくゝかゝくゝまう
よゝうゞゞ」とあるハさ紀ふ源氏ゝの紀のゝゝゞうあゝゝく

やゝ水ふすゞみまいゝ浪まこゝのゝちくおそてくるこゝを
ゆゝしのめいぢくゝいくるゝありされバ半人すゞの扇えがて
らおりゝゝるふハかゝやゝの風をいれてもかゞゞしさゞゞく
風ゞをふえんゞもゝる風ゞめをまゞへてうくハむいゝゆゆる
るゆれゞ半人すゞふまふハちかをてなゝゝゝゆゆるもあり
そのゆれさアゆちゝゞひくゝのまゞゝしさてゆさゝ事
ふいへゝゝ人ゆまゝひゆゝくゝゆみけられさゝ所のゝへゝ
をさゝのゝふうをゝゝゝすふ浦ゝゝとハかゝまゞくゝれ
とゝのゝゝゆてゝゝをゝゝ世ハなめさつゝ

さゝはおのゞ半ゝ浦ゝゝあゝ
うゝんゝゝふうゝんゆりさて又人ゆゝゝゝるふゝゆ中ふ
あるゝれゝゝハゝれゝゝゝゝも文の中ふうをゝゝ ゞくゝ
ゝのゝゝれゝんゝ中ゆみおゝゞゞゝゝに出かゝゝゝは
かゆゝゆりされどゝゞ半ゆゝハまゞゝりさゝ
なゞハちゝゝのゝくまゝる浦ゝゝふなゞゝうふもうゝて
おゝゞきたゆゞもおゝゝゝゝ半ゝハゝゞかゝゝと
かゝはゝゝふうをゝゝゝゝ

こゝば書のさゝふひゝぶるふなゝへるひがことゝ物ゝ」こ
ありゝれまゝゝたゝおゝぐきゝゝゝれバゝゝふゝいゝでゝ
○花見月見などゝゆゝゝる時の詠ゝハゝゝるゝふゝ人ゝゝのゝ
あゝゝんゝゝも詞ゝゝゝハかゝゝまゝゝでゝゝきゝゝめゝゝりゝゝゝゝゝの月ゝゝを
見ゝふゝゝゝて由ゝゝゝゝゝゝんゝゝハ月花すゝゝゝち分の詠ゝれバ
伊ゝゝかゝゝゝゝゝゝ

風あらしとん」とある歌は、はるばるとうめうの花を書のと
いふことをおだやかにハ行のあるもなくれば、あれはてて
人も行かざりしかどもかふとしるしるこれ出てさる
所の花をたづねてあそれてあそれふくまさに日葉に
とまり大のかたふさくこの花をうくさて行うるを
とあらくこの花のかふさはけるさてはなれば人のあるも
あらどとぞおもふ」とあるは日本（ヒノモト）より物（ヒノモト）をかみる元
をもくせんとくくはけふとめ大のかくふとかけるあり
かやうの歌はかるべきのことをうを詞をかかれ

すべくこの花ハこれはるばるこれ出きをあてかくべきと
さて草の詞をさハさふかくしくとふくぐりかくはる
太陽がそりぐるぐるよめるまろぐるをかくをうるといふ花の葉の
を詞ふくくをしいそく委
しるそうんありあるせ者ふべし　さてもうるみかいのべきるのり
それハすべくくろうるを人のくせとして花うるぐるり
てハなるけかく枝をおりとうあるひをたくうぐみをひき
さたくくうるいそれぬ前のどうるく根ふ由ひつけなど
すくとうるり兼好なくうぐはれ事ふもいへるべくく
前の枝をおりとり梟ふあきー初らーなどのうの和
よくそれぐうるくくとうるれハいみどくくうるれるなな

まづ[illegible]つぼめやさくつぎ[illegible]くいやく[illegible]をば
ばさまでたり花の枝ふ[illegible]
あれどいとよろしもあくまひ[illegible]
つくるをばふあさきをのみまつの梅[illegible]
かきをばとかばぐ[illegible]
ふれよいてく春のころもひ花の枝[illegible]
かのふむすびつけ[illegible]
平反のうちひ[illegible]
よかのうれちく[illegible]

ぬ[illegible]
だりの人[illegible]
いをきく[illegible]
まへふ[illegible]
べ[illegible]
ぬ[illegible]
なく[illegible]
○右のかふもなりもの[illegible]

つちの[illegible]

まづこゝろざすことのゝをろ〳〵もとゝのへられば
そのかをぞ戸をあけ〳〵ゝる徇どの〳〵ゆきふたひらの人て
かゝえ〳〵づくりの〳〵ゝゝゝ

なるべきことと本居先生の説ふいとれるごとく
いそんや実名（ジツミヤウ）の下に大人（ウシ）などをかくべきハ笑ふべき
ものなり実名をとなへ妻子（メコ）奴僕（ヤツコ）あど我ようの下ざまなる
事なれどハいとあぢきなくあるを大人とのみかくべき
人の名をとなへてよろしかるべきやハ大人といふ称（ナ）のなるふ
と論あれどこふよろしなるまでハ別ありべしされど記
の人よりをみく氏名字などいれてよとこのあるべ
やむるとなるべしてかくこもあるべきなれど大く
かくもべきなるものなるひとめるれこと事を

なるべくふかくあらんことをあやまりなるの事もあるべくあど
上ふりへる事どめをよくくよみあぢをひくひごと
たることをさとるべし　いとこと上つ代の人ばかりハあるべくてつけ
ざりそこしもあれども亦名あるどいふるものあるをりてあめばぐらの
名ふこの人のようぶ名ふそちもめありうんともあるがゆゑさはあるとも
ひふふるひ方ようあるどふハその例をとりいでく人の名をよぶとも
つくるとさどむる人もあるハいとあぢきなくかくよハるもう
あきくくハのうこうぐるものこるぐるくの名をばうぶもどもやう
あれバそれをおうこんハさうあるべくくこちふくむいるるもの
ぐくをいぶハせんよりくくこちふくむいるるもの
あるのあどきこのそう
○人ふ對（ムカ）ひくくかく詞書ふハ自他ふつきてうやまふへき
とさめあくあるのぢあることをよくくらたまへおく

[illegible]たとへば君と父母とはことなるあくまでもさ
らあるまでどこの君父母のこゝめふきこゝもかゝゝゝゝ人と
向ひくいふまたのくまふ[illegible]するゆゑいとんハかゝゝよりゆく
せられいとれとやうの句をもつゝぐゝゝどこれするいふと
やうふいふこと定まりゝとゝるとゝもれい上ざまのゝいつま
ゆとちうへばをゝゝ語ゝぬことなるをとゞ侍ハあゞじ
人ゆむゝゝとゝゝゆやうひ詞をたくるをそゝきことゝして
おのゞちうおやゝさゝゝゆもいとゞやゝゝあゞちのゝるゆさん
せられいとれとやうふいくう京大坂のちざまの俗語ふハ誤

この誤わゝゝとれをちんとしくみやび詞をかくハと
すゝ　ふいゆゝゝゝあげゝるゝこをもかたゝゝゝゝゝ
されどゝれどゝのゝハをゝゝめくゝちゝゝハとたきくゝ
ゝたゝゝゝゝゝ師ゝゝ方ゝゝちなどの事ふハゝゝゝゝゝ
いゆゝゝひなるハ程ひゞゝとゝゝこのゝゝたゝくゝたとゝち
外
ゝの詞あゝくゝをよゝくゝるたすんゆたゝうゆゝこうんゝ
らゞゞちゝゝたゝゝれふゆの序跋のゝゝひゆもゝゆゆやゝう
ゝゝくゝとゝゆゝゝ仏ゝ序跋のゝゝひゆハ雅ふゆゝひていふ
ともゝたゝゝゝれハ師ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なごハ□れ□ま□て□れ人ゝく□や□ま□を□ゝむ□ま□ゝの
よの人ゝよハ□ゝ□た□て□ゝ□ゝ□れバ□す□ゝ□ふ□ゝやゝふかく
べたをさゝめあゝぬハ□ま□ぬ□ゝ□ゝ□ゝを外ゝ□ゝるかゝさ
ざ□ゝ□ゝて□ゝ□ゝハ□ゝ□ゝ□ゝ□れ□ゝ□ゝ□ゝ□ゝ□ゝ□ゝ
ゝれゝゝたゝゝ□ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てかゝ都ゝ□ゝ□ゝ□ゝ□ゝ□

まくハまふくの給りしる詞あれバうゝぐまふとおを
そへくいあべしうまふハ随字のそこゝ　あるのふちぐひ
しきるゝとなるゝのたぐゝいの詞ふまゝバうやうの面ふハうゐひ
ぐゝこれハあまりふおりうゝれしゝのあまりふ
まゝ人のいひおそゝるゝ文ゝバをもるゝゝる事よ云く
。あるゝまゝバ云ゝとあれバといふ事のあるゝれハめのふた
ゝ事ゝ書く時の仮ふくゝさゝふくふむゝひくゝいあゝき詞を
あゝゝさるをかくゝ犯くハなあゝある詞ゝまゝとなるゝゝ
ゝまゝゝ給るゝの面ハ生をまのいゝれゝやゝふおやまひ

てゝの面ゝ給ふ給ゝゝスルとゝふゝどのまゝあれバりのふもゝ
しおゝ類ふハりゝゝべゝゝ文まゝゝゝでまゝゝゝまゝゝゝゝゝのゝ
出ゝゝ犯もゝゝゝ

○はゝ犯草ゝ云ゝふゝ云ゝまれゝ人のゆゝゝゝる云のゝまゝま
ゝゝゝばまゝゝりのゝすゝふれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝハりゝのゝかゝ犯はゝゝゝ二句一句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
句一句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
云のにゝゝけゝくゝよあゝるはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

されどこハ一つゝのはぐゝめかりうちひてらかゝらひめづゝそのゝ月れ
ありつゝさまよりくもくもうづくもうづやうかく
そゝとうつ伊勢あ作ふむさゝのくゝめゝひみちのくれ
ぶりぢぶりいれのゝふゝぶれそあゝりられるゝたるふゝいふゝ
のゝくゝくゝりと　かゝまさゝうかゝるハ後撰集まそのゝふう
もゝくゝぐゝゝ
バとひのきゝんもせゝぐいゝぐゝるびきのやゝとゝんといふる
ゝのゝゝゝをを女ゝいひつゝりたるきれバ金毛青赤小添頼家ゝりのゝるゝ人
のゝせちゝゝあゝくゝ作りゝるゝをゝすゝくゝまゝゝふゝやゝあゝまゝくゝさゝのゝをゝ表
ゝゝのゝあゝりれゝりるゝ紀世ふゝゝゝゝゝゝゝゝりれバといふる
ありゝハゝゝけゝくゝるゝゝのゝゝのゝゝかゝるハ後撰集
ゝゝまゝさゝゝんゝまゝゝゝるゝゝぐゝふゝゝゝゝゝるゝ
女のゝふ男かゝゝゝ世をゝやゝたゝくゝさゝんゝゝるゝのといふゝまゝを
いひゝくゝゝたゝゝゝまゝ山又図集あひゝゝとて作ゝるゝへのゝと

久ゝゝまゝゝゝぐゝゝゝまゝバゝらゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ

はりてまばたきをしてけりをいうゐれだかくハとゝうる
返すにつゝらしけるなゝなれよるせのもゝ波あさゐれだとま
るいの毋くゝるれるべしかへ〳〵川ふるたふもあくだい
たぶねのゝうろくもかゝゑれるうたは五句のうちをたゞ一句のこ
の紀さくんハさゞうたそのおとまゝくまゝくおゞつゝなれた
半のあまこバ名ゝうれふるゑれむゝあるゑふるだう
〳〵る事れり」下畧廣道云この一こゞりハ人のゝとゝまゝ
云のおゝせゝくんをうふかゝしおゝまるせんおゝいとゐる
べゝれバゝく出ゝれどゝ引ゝゝなりたゞしそのおゝう

おゝせゝくゝ人ふむゝひゝくいゐるまゝば安おゝ中を一二句で
うゝ云うゝとあるゝゝ後をぬきいでゝかゝくゞしおゝうゝる
人ゝむゝひゝくゝそのゝをかんゝみるゞゝうゝ出んゝくゞく
しゝなゝびなりまゝ安ふかゝる所をゝ云ゝゝとのゝまひ
おゝせゝふゝゝ言」なゞかゝくゞしゝなゞ安ふゝ云ゝくのく
のゝおゝゝとゝ実ゐゝくゝゝゞけゝバ云ゝゝとのゝまハせ
洗ゝくゝしゝハ待ゝ稼ゞ」なゞやゝふかゝくゞしゝ者ゝ者」
うゝちあハぬゝにゝぶふ洗ゝくゝ者ゝゝうゝ紀ゝゝるハゝゝゝき
ゝのゝゝゝあふゝ紀ゝゝるゝ時のハ皆右ふ者ゝれゝる撰集

の詞ゞ記れおやまひ詞をたゞしくかゝへうたゞ
しき記の人氏名をば記されゞかくるぞ記きうをぎれ
ぞとゞ所の記明らかに記さゝぬ事もあるべし撰集ふる
されこゝ事も生きりの人氏名を一二句ぞうあげゝれ
ぞこゝふハゆえゞゞぞこともあるありこれハそのゝみぬを
よくきゝこゝぞこゝ事ゆゑふなのことく一二句ぞうもれつを
そのまゝふ撰集ゝれこゝあるべしゝ人うゝ記ゝるこん
かゝぞこゝよゝいて一ゝこゝあゞゝかゝてゝ記をくゝ〻
きこゝふは志ゞ

上件の事どのゝ事をびゝく問おとする人のちゝふゝこゝも
あるべいゝ人ぞるゞうゝ作ゝてひゝゝゝゝかゞきゝて
おきてんゝゝゝひわゝてをゝつ人のゝ記より一日ゝん
ちゞゝきゝゞ記して々ゝのゝでふり記あゝこあゝるをゝう
ふゝぬみあ記ゝよ松ゝ事のあるべおのゞやめゝを
とあゝふゝゝく事りゝ記ゝゝかゝやゝのふゝゝあゝこ
をゝ〻なゞあゝ人もあるべ板ふゝゝゝくゞどゝゝゝん
とゝふふゝゞかゝ記ゝ記ゝ記ゝふせぬものをゝていゝひ
ゝゝゞもゆゝゝあくゝあゝゝにをんゝゝあくゝゞあひて

こゝかしこの紙ゝまきゆくさきへやうつされバ
いまはすこしいのべきこゝのあるをもとしおこらのべきす
の後ふなりなどもゞ　おもたきあゆみ　小文のこゝばさん
ゝこゝひとゝびぐ　ぐもれおりゝんをうんひこ
さゝゝふひさ　ゝてようゝみぐのゞりき物あれど
まけいむ云のゝ　ゝ　ゝをゆとゝ
かゝぐ　ゝくまゞやゝ　ゝなゞな

嘉永元年戊申　秋九月廿六日書於浪華　高麗橋寓居

心の学孫

萩原先生編輯　小本全二冊

此書ハ近来詠哥の事ニ用ある書の中より緊要の事どもを抜き
引出て初学の心得やすからんやうニ今案を注し此一編ゆゑ哥学の傳
授事さゝむべきやうニ秘説を借まゝあらはしてゝ書ふれバ哥よ
む人の座右ニあるべきもの此書の右ニ出ることなし

詞書葉山の栞

同著　小本全一冊

此書ハ年賀懐旧婚礼元服送別遊覧の類今の人ハ交會の
ゝて人と贈答さゝる哥のかゝ　ゝ　ゝを委く論定し且
其かゝぐき初まりを草して出さゝてゝれバ初学の人ハ必座右ニ
おくべき書なり

心の種拾遺

同編輯　近刻嗣出　小本全二冊

此書ハ前編ニ遺まるを拾ひ　ゝ長哥の格法よみ　ゝ文章の
規矩かゝ　ゝを論じ結び題ニ自他の紛ら　ゝ　ゝ歌を古哥を引て

ようもべきやうを喩し又詞寄をもつて挙らるるてゝう詞寄の書八世ホ多くといへども多くは記書八假字さゞひ新しきを古言と後世言との差別をなして初学の害となる事多きをもて此度假字を平古言後世言を分ちて出さるるれば尤益ある事多き書なり

同編輯　小本全一冊

古言譯解

此書八万葉集よりあるゝの古言を俗語ホ譯して五十音の頭字引ホせらるるなるるバ万葉集を讀ミ且古体の歌をよむべき初学の為ホ大なるべ益ある書あり

同著　近刻　大本全三冊

本學提綱

此書八皇朝先皇の大道を本とゝして外教の得失歴朝の沿革を委く論じ今世ホして士人ハ勤むべき学業を十科に分ち各々の学びやうを喩し神教の今日ホ用あるべき経済の旨を述らまつらるる書なるバ先生学風ハ概畧を窺ふべ記有益の書なり

浪華書林　積玉圃主人識

和漢洋書藉出版所

發行者　大阪市南區安堂寺町四丁目　青木恒三郎

製本發賣所　大阪市心齋橋筋安堂寺町　嵩山堂本店

仝　東京市南傳馬町二丁目　嵩山堂支店

仝　勢州四日市港竪町　嵩山堂分店